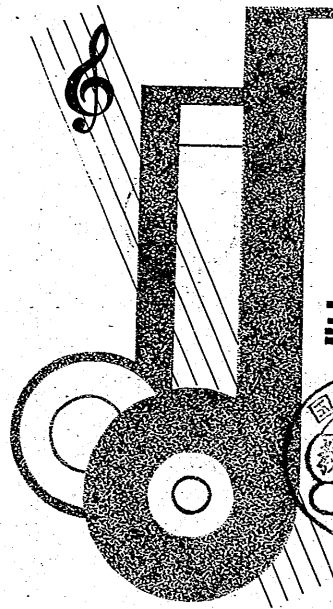
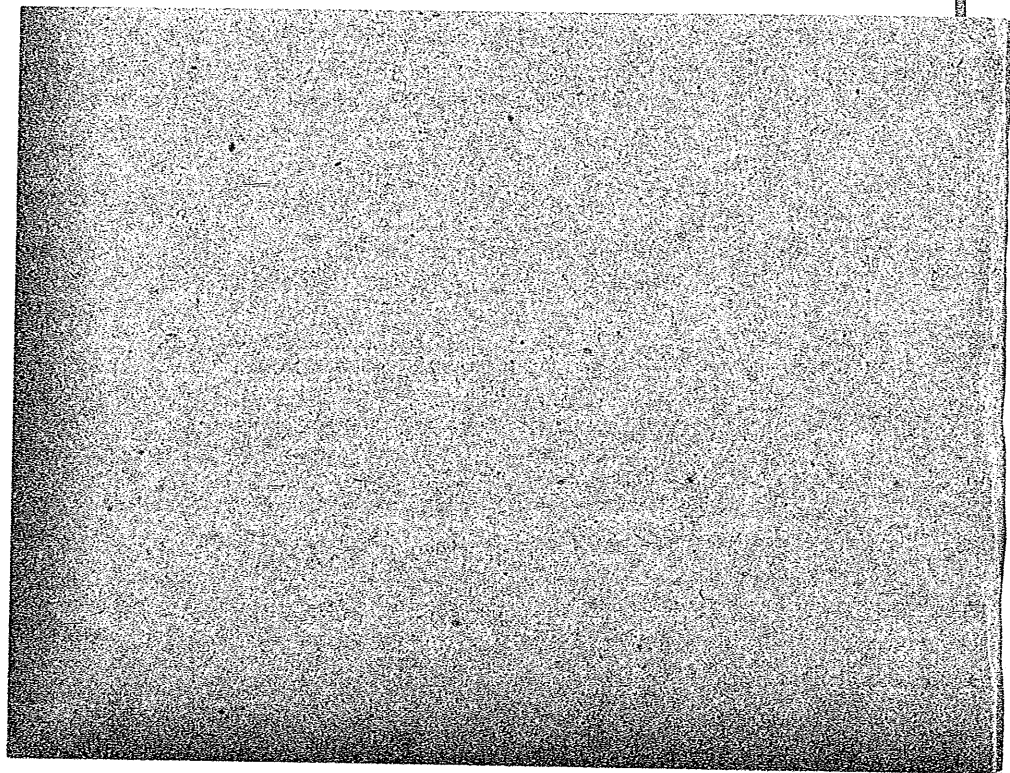


新訂
尋常小學唱歌

第六學年用

文部省





文 部 省

新 訂
尋 常 小 學 唱 歌



第 六 學 年 用

緒 言

- 一、本書ハ音楽教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ、從來本省著作ニ係ル「尋常小學唱歌」ニ改訂ヲ加ヘタルモノナリ。
- 二、本書ハ每卷二十七章トシ、取扱者ニ選擇ノ餘地ヲ與ヘタリ。
- 三、本書ノ歌詞ハ、舊歌詞中ノ適切ナルモノ、新作ニ係ルモノ、及ビ^{尋常}國語讀本・尋常小學讀本中ノ韻文ノ一部ヨリ成ル。
- 四、本書ノ歌詞ハ努メテ材料ヲ各方面ニ採リ、文體・用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。
- 五、本書ノ教材排列ハ強ヒテ程度ノ難易ノミニヨラズ、一面季節ニツキテモ考慮セリ。
- 六、本書ハ取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、二種類ヲ作製セリ。教授ニ際シテハ其ノ何レヲ採用スルモ可ナリ。

昭和七年十一月

文 部 省

目 次

<p>一 明治天皇御製.....2</p> <p>二 朧月夜.....4</p> <p>三 遠 足.....6</p> <p>四 我等の村.....10</p> <p>五 瀬戸内海.....14</p> <p>六 四季の雨.....16</p> <p>七 日本海海戦.....18</p> <p>八 我は海の子.....22</p> <p>九 日本三景.....26</p> <p>一〇 風.....30</p> <p>一一 蓮 池.....34</p> <p>一二 森の歌.....36</p> <p>一三 瀧.....40</p> <p>一四 出征兵士.....44</p>	<p>一五 故 郷.....48</p> <p>一六 秋.....50</p> <p>一七 燈 臺.....52</p> <p>一八 天照大神.....54</p> <p>一九 鶯.....58</p> <p>二〇 鎌 倉.....62</p> <p>二一 霧.....66</p> <p>二二 鳴 門.....70</p> <p>二三 雪.....72</p> <p>二四 スキーの歌.....76</p> <p>二五 夜の梅.....80</p> <p>二六 齋藤實盛.....82</p> <p>二七 卒業の歌.....86</p>
---	---

目 次

一、明治天皇御製

一、物學ぶ道にたつ子よ、
 おこたりに、まされる仇は
 なしとしらなむ。

二、さし昇る朝日の如く、
 さわやかにもたまほしきは
 心なりけり。

三、おのが身はかへりみずして
 人のため、盡すぞ人の
 務なりける。

明治天皇御製

♩=92

明治天皇御製

タのミ
ニひり
チさへ
ミあか
づるハ
ナぼミ
マのガ
ノしノ
モさオ

アしヒ
ルほゾ
レます
サたク
マもツ
ニにメ
リかタ
タヤノ
コわた
オさヒ
ヨクテ
コとシ
ツこズ

ムりル
ナけケ
ラりリ
シなナ
トロメ
シント
ナニツ
ハはノ
タキト

二

二、朧月夜

一、菜の花畠に、入日薄れ、

見わたす山の端、霞ふかし。

春風そよふく、空を見れば、

夕月かかりて、にほひ淡し。

二、里わの火影も、森の色も、

田中の小路をたどる人も、

蛙のなくねも、かねの音も、

さながら霞める朧月夜。

朧月夜

♩ = 72

朧月夜

一 ナノハナバタケニイリヒウスレ
二 さとわのほかげももりのいろも

ミソタスママノハカスミフカシ
たなかのこみちをたどるひと

ハルカゼソヨフクソーラヲミレバ
かはづのなくねもかねのおとも

エフツキカカリーテニホヒアハシ
さながらかすめるおぼろづきよ

四

遠 足

♩=120



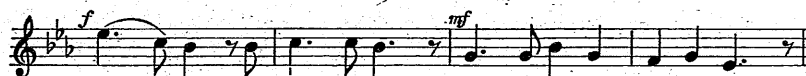
一 ナ ク ヤ ヒ バ リ ノ コ エ ウ ラ ラ カ ニ
 二 み ぎ に み ゆる は な だ か き み て ら
 三 タ ド リ ッ キ タ ル タ ウ ゲ ノ ウ ヘ ニ
 四 か せ は お と な く や な ぎ を わ た り



カ グ ロ フ モ エ テ ノ ハ ハ レ フ タ ル
 ひ だ り に と ほ く か す む は こ じ や う
 ナ ノ ハ ナ ニ ホ フ サ ト ミ オ ロ シ テ
 ふ ね は し づ か に わ れ ら を の せ て



イ ザ ヤ フ ガ ト モ ウ チ ツ レ ユ カ ン
 は る は 忍 の ご と わ れ ら を め ぐ る
 フ ラ ヒ サ ザ メ ク ヒ ル ゲ ノ ム シ ロ
 ゆ く は い づ こ ぞ も も さ く む ら へ



ケ フ ハ ウ レ シ キ エ ン ソ ク ノ ヒ ヨ
 け ふ は た の し き 忍 ん そ く の ひ よ
 ケ フ ハ ウ レ シ キ エ ン ソ ク ノ ヒ ヨ
 け ふ は た の し き 忍 ん そ く の ひ よ

三、遠足

一、鳴くやひばりの聲うらかに、
かげろふもえて野は晴れわたる。
いざや、我が友うち連れ行かん。
今日(けふ)はうれしき遠足(とんそく)の日(ひ)よ。

二、右(みぎ)に見ゆるは名高(なだか)き御寺(ごでら)。

左(ひだり)に遠く(とほく)かすむは古城(こじょう)。

春(はる)は繪(え)のごと我等(われら)をめぐる。

今日(けふ)はたのしき遠足(とんそく)の日(ひ)よ。

三、たどりつきたる峠(たがひ)の上に、

菜(な)の花(はな)にほふ里見(さとみ)下(くだ)して、

笑(わら)ひさざめくひるげのむしろ。

今日(けふ)はうれしき遠足(とんそく)の日(ひ)よ。

四、風(かぜ)は音(ね)なくやなぎをわたり、

船(ふね)は静(しず)かに我等(われら)をのせて、

行く(い)くは何處(いづ)ぞ、桃(もも)さく村(むら)へ。

今日(けふ)はたのしき遠足(とんそく)の日(ひ)よ。

我等の村

♩=66

一 カ ス ム ヤ マ ベ ー ハ ム ラ サ キ ニ ホ ビ ノ
 二 い で て た か や ー す を と こ の た め に そ
 三 ト メ ル マ ツ シ ー キ サ マ ザ マ ナ レ ド ム
 四 こ こ ぞ わ れ ら ー の う ま れ し と こ ろ こ

poco rit. *a tempo*

べ ハ コ ガ ネ ノ ナ ノ ハ ナ ザ カ リ ー ハ
 ら の ひ ば り は ひ ね も す う た ひ ー う
 ラ ヲ ア イ ス ル コ コ ロ ハ ヒ ト ツ ー オ
 こ ぞ わ れ ら の そ だ ち し と こ ろ ー や

ル ノ ヒ カ リ ハ ク マ ナ ク ミ チ テ ナ
 ち に は た ら く を と め の た め に は
 イ モ ツ カ キ モ タ ガ ヒ ニ タ ス ケ ム
 が て わ れ ら の ち から に よ り て く

ク ヤ ニ ハ ト ー リ コ エ サ ヘ ノ ド カ
 な は ま が き ー の ほ と り を か ぎ る
 ラ ハ サ ナ ガ ー ラ イ ツ カ ノ ム ツ ビ
 に の ほ ま れ ー と な す べ き と こ ろ

四 我等の村

一、霞む山べは紫にほひ、

野べは黄金の菜の花盛。

春の光はくまなく満ちて、

鳴くや鶏聲さへのどか。

二 出でて耕すをとこのために、

空のひばりはひねもす歌ひ、

うちに働くをとめのために、

花はまぶきの邊を飾る。

三 富める貧しき様様なれど、

村を愛する心は一つ。

老いも若きも互に助け、

村はさながら一家のむつび。

四 ここぞ我等の生まれし處。

ここぞ我等の育ちし處。

やがて我等の力によりて、

國のほまれとなすべき處。

瀬戸内海

♩ = 84 *mp*

ノドケキハルノアサボラケダツ
 マンヘツケキナミタニシカゲツミ
 キマリニチタチテナガムレバアトニ
 サホヒクキラメクナミミノタウヘオホマ
 カメニガカヤスガムシマカモヤマケノバカゲ
 ハハカヤスガムシマカモヤマケノバカゲ

瀬戸内海

オモムハロニウツリユクク
 ナイイカニシフマインクビ

五 瀬戸内海

一、のどけき春の朝ぼらけ、
 デツキに立ちて眺むれば、
 朝日きらめく波の上、
 おぼろにかすむ島山の
 影おもむろに移りゆく。

二、前より来る白帆かけ、
 忽ち後に消え去りて、
 遠くかすかに見えたりし
 島影やがて近づけば、
 又あらはるる島いくつ。

三、静けき波に影うつす
 緑にまじる花ざくら、
 にほふ山邊もいつしかに、
 眺は變るおもしろさ、
 瀬戸内海の船の旅。

六、四季の雨

一、降るとも見えじ、春の雨、
 水に輪をかき波なくば、
 けぶるとばかり思はせて
 降るとも見えじ、春の雨。
 二、俄に過ぐる夏の雨、
 物ほし竿に、白露を
 なごりとしばし走らせて
 俄に過ぐる夏の雨。
 三、をりをりをそぐ秋の雨、
 木の葉・木の實を野に、山に、
 色さまさまにそめなして
 をりをりをそぐ秋の雨。
 四、聞くだに寒き冬の雨、
 窓の小笹にさやさやと、
 更行く夜半をおとづれて
 聞くだに寒き冬の雨。

四季の雨

四季の雨

The musical score is written in G major, 2/4 time, with a tempo marking of 60. It consists of four staves of music. The lyrics are written below the notes. The first staff begins with a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a tempo of 60. The lyrics for the first staff are: フにちき、ルはりく、トかすだ、モにりに、ミナリさ、エグソむ、ジるがき、ハなアふ、ルツキゆ、ノのノの、アアアあ、メめメめ。 The second staff continues with: ミのゴま、ソほノど、ニしハの、ワさコな、チノざ、カなミさ、クにチに、ナしノさ、ミらニヤ、ナツヤさ、クイマヤ、パなニと。 The third staff has: かなイふ、アゴロけ、ルリサゆ、トとまく、バシサよ、カバマは、リしニカ、オはソお、モしメと、ハち一づ、モサナれ、チてチて。 The fourth staff concludes with: フにちき、ルはりく、トかすだ、モにりに、ミナリさ、エグソむ、ジるがき、ハなアふ、ルツキゆ、ノのノの、アアアあ、メめメめ.

一六

日本海海戦

日本海海戦



一チキカンミエタリチカヅキタ一リ
 二じゆりよく一かんたいま一へをおさへ
 三トウ一テンアカラミヨ一ギリバレテ

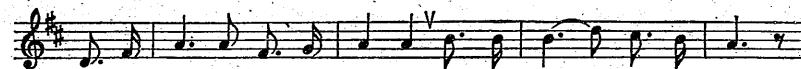


ミクニノコウ一ハイダダコノイツキヨ
 しゆんやう一かんたいうしろにせまり
 キョクジツカガヤクニツボンカイジャウ一



カクキンフンレイドリョクセヨト
 ふくのねすみとかこみうてば
 イマハヤノガルルスベモナクテ

日本海海戦



キカンのホバシラシンガウ一アガル
 みるみるてきかんみ一だれちるを
 ウタレテシヅムモクダルモア一リ



ミソラハハルレドカゼ一タチテ
 すぬらいていたいくち一くたい
 テキコクカントイゼン一メツス



ツシマノオ一キニナミタカシ
 のがしはせ一じとおひてうつ
 テイコクバンザイバンバン ザイ

七、日本海海戦

一、敵艦見えたり、近づきたり、皇國の興廢、ただ此の一舉、各員奮勵努力せよ。」と、旗艦のほばしら信號揚る。みそらは晴るれど風立ちて、對馬の沖に浪高し。

二、主力艦隊、前を抑へ、巡洋艦隊、後に迫り、袋の鼠と圍み撃てば、

見る見る敵艦亂れ散るを、水雷艇隊・驅逐隊、逃しはせじと追ひて撃つ。

三、東天赤らみ、夜霧はれて、旭日かがやく日本海上。

今はや遁るるすべもなく、撃たれて沈むも、降るもあり、敵國艦隊全滅す。
帝國萬歲、萬萬歲。

我は海の子

♩=126

我は海の子



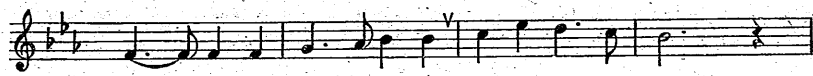
ノてニてルもテ
 ミシカリタンシ
 ナミノツヘギダ
 ラあソヤターリ
 シゆイあきよノ
 コにクニニふラ
 ノほツイコよネ
 ミーナか一だ一
 ウしハろコたフ
 ハてタのセにホ
 レれカよトみオ
 一ま一ク一デ
 フラタやいなイ
 一ニ三四五六七



ニきリらリやミ
 ラきアクアんと
 バとりまなれノ
 ツたラみヒそミ
 マうかなカおウ
 ノのノぬキレン
 ベリナめタたハ
 ソも一だ一ロ
 イニハさカきヒ
 グをノてリばハ
 ワみンクヨラレ
 一一ダ一ツた一
 ナなフゆテきソ
 一ニ三四五六七

三

我は海の子



ソをラニルもテ
 コぎゼそタきミ
 ヤのカのミまク
 マみクみロツリ
 ト、うフラクたノ
 クるニニニニ
 ビくツろぞるン
 ナせ一ひ一ぐ一
 タよまちカあカ
 リりノろホギン
 ムんサひシまダ
 一ギもクみデ
 ケせナもフライ
 一ニ三四五六七



レリクシニヒニ
 ナけキララカク
 カにハひガろノ
 ミリレはサドミ
 スなワにサおツ
 キととる一れン
 シベクたウコラ
 一ら一れク一モ
 カわがなシおマ
 ツてキびハばハ
 ナひジそダラレ
 ガ一ミ一ニ一
 フすイあハおワ
 一ニ三四五六七

三

八、我は海の子

- 一、我は海の子、白浪の
さわぐいそべの松原に、
煙たなびくとまやこそ、
我がなつかしき住家なれ。
- 二、生まれてしほに浴して、
浪を子守の歌と聞き、
千里寄せくる海の氣を
吸ひてわらべとなりけり。
- 三、高く鼻つくいその香に、
不斷の花のかをりあり。
なぎさの松に吹く風を、
いみじき樂と我は聞く。
- 四、丈餘のろ・かい操りて、
行手定めぬ浪まくら、

百尋・千尋海の底、
遊びなれたる庭廣し。

- 五、幾年ここにきたへたる
鐵より堅きかひなあり。
吹く塩風に黒みたる
はだは赤銅さながらに。

六、浪にただよふ冰山も、
來らば來れ、恐れんや。
海まき上ぐるたつまきも、
起らば起れ、驚かじ。

七、いで、大船を乗出して、
我は拾はん、海の富。
いで、軍艦に乘組みて、
我は護らん、海の國。

日本三景

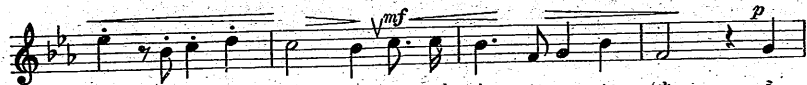
♩=88



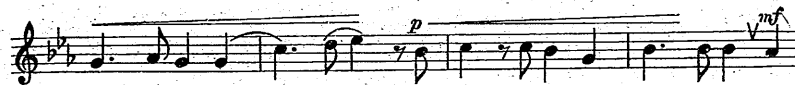
一 ミ ド リ シ タ ダ ル ヤ マ ー フ ウ シ ロ ニ ナ
 二 よ さ の う ら な み と ほ く つ づ げ る な
 三 マ ツ ノ ア ラ シ ハ サ サ ヤ キ ア ヒ ー テ ウ



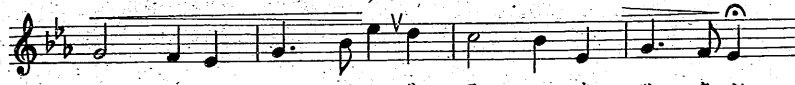
ミ ニ タ ダ ヨ フ ア ケ ノ ク ワ イ ラ ウ ー タ
 か を か ぎ り て う か ぶ ま つ ば ら あ
 ミ ニ チ リ ボ フ チ シ マ イ ホ シ マ イ



シ ノ ミ ヤ キ ノ ス ガ タ ハ コ レ カ ミ
 め の か よ ひ ち た え し は い つ か か
 カ ナ ル カ ミ ノ ナ シ シ タ ク ミ ズ ク



ギ ハ ノ ト ウ ー ロ ウ ー ミ ナ ヒ ラ ト モ シ テ ヨ
 が や く ひ か げ に か み の よ お ぼ え て あ
 ス シ キ ナ ガ ー メ ミ ル マ ニ カ ハ リ テ ア



ル ノ ミ ヤ シ マ サ ラ ニ ウ ツ ク シ
 さ の は し だ て こ と に め で た し
 メ ノ マ ツ シ マ イ ヨ ヨ メ ヅ ラ シ

九、日本三景

一、緑したたる山を後に、

波にただよふ朱の廻廊、

たつのみやゐのすがたはこれか。

みぎはの燈籠、皆火をともして、

夜の宮島、さらに美し。

二、與謝の浦波遠く續ける

中をかぎりて浮かぶ松原、

天の通路絶えしは何時か。

かがやく日影に神の代おぼえて、

朝の橋立、殊にめでたし。

三、松のあらしはささやきあひて、

海にちりぼふ千島・五百島、

如何なる神のなしし巧ぞ。

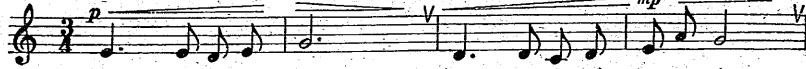
くすしきながめ見る間に變りて、

雨の松島、いよよ珍し。

風

♩=100

風



一 カゼヨカゼソモイヅチヨリ
 二 かぜよかぜそもいづちより
 三 ヨハフケヌトモシビキ
 四 よはあけぬとくおきいで



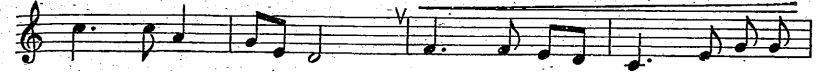
イヅチフククサノウウヘ
 いづちふくくいけのうへ
 ネニユケバナクさはゴト
 ねにゆけばなくさははふとし



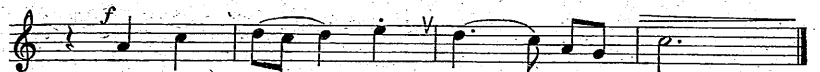
ヤブリノナカヲカラスギ
 やむりのはなかとむららすすぎ
 ムセはたふれはなはち

三

風



タニヲスギシカリモカヨハヌ
 さとをすぎとかりもかよはぬ
 マドヲウツカカゼヤカウラヤ
 みはおちぬかかせやあれけん



オクラヤマコエテ
 あらうみこえて
 フガコらこに

三

一〇、風

一、風よ風、

そもいづちよりいづち吹く。

草の上、やぶの中、

岡を過ぎ、谷を過ぎ、

鹿も通はぬ

奥山こえて。

二、風よ風、

そもいづちよりいづち吹く。

池の上、森の中、

村を過ぎ、里を過ぎ、

鳥も通はぬ

荒海こえて。

三、夜はふけぬ。

燈消してねに行けば、

泣くがごと、むせぶごと、

戸をたたき、まどをうつ。

風やうらやむ、

我が此のふしど。

四、夜は明けぬ。

とく起出でて園見れば、

草はふし、木はたふれ、

花は散り、實は落ちぬ。

風や荒れけん、

夜すがら此處に。

蓮 池

蓮池

♩ = 160

一 マ ル ハ マ キ バ ラ ソ ヨ ガ セ テ
 ニ い け の ほ と り に た た ず め ば

ア サ カ ゼ フ タ ル イ ケ ノ オ モ
 は な の か お そ ふ そ で た も と

タ ツ ヤ サ ザ ナ ミ ウ キ ハ コ エ テ
 そ ら は つ き し ろ ほ の か に み え て

マ ロ ビ マ ロ ブ ツ ユ ノ タ マ
 み づ に し ろ し は な は ち す

三四

ア ア ス ズ シ ス ズ シ ア ケ ホ ノ
 あ あ す す し す す し ゆ ふ ぐ れ

蓮池

二、蓮池

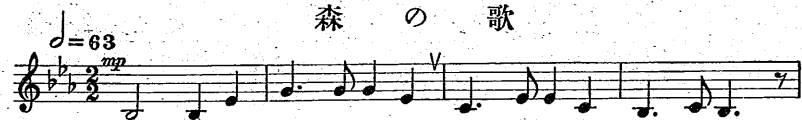
一、丸葉・卷葉をそよがせて、
 朝風わたる池のおも。
 立つやさざなみ、浮葉を越えて、
 まろびまろぶ露の玉。
 ああ、涼し涼し、
 あげぼの。

二、池のほとりにたたずめば、
 花の香おそふ袖袂。
 空は月しろ、ほのかに見えて、
 水に白し花蓮。
 ああ、涼し涼し、
 ゆふぐれ。

三五

森の歌

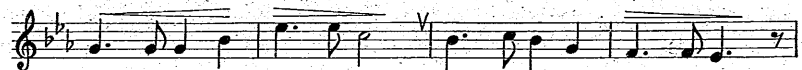
森の歌



一 モ リノ オ イキハ コ ズエニ ミ キニ
二 も りの し たみち た どりて ゆ けば



カ ミヨ ナ ガラノ シ ンビヲ コ メテ
し ばし こ のまの く らさは は れて



イ トオゴ ソ カニ シ ズマリ タ テリ
ふ とみる か なた い づみは ほ がら

三六

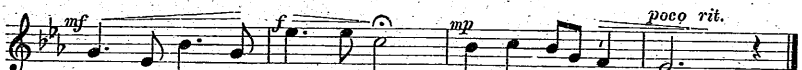


フ シギヤ コ ダ マハ コ ダ マヲ ヨ ビ テ
ふ しぎや や ま ひめ ほ ほ 急みたちて

森の歌



モ リノ ヒ メゴト カ タルト キ ケバ
み すに す がたを う つすと み れば



ア ラズ コ ズ タフ ト リノーコ エ
あ らず ひ と も と ゆ りのーは な

三七

一、森の歌

一、森の老木は、こずゑに幹に、

神代ながらの神祕をこめて、

いとおごそかに静まり立てり。

ふしぎや、木靈は木靈を呼びて、

森のひめごと語ると聞けば、

あらず、木傳ふ鳥の聲。

二、森の下道たどりて行けば、

しばし木の間の暗さは晴れて、

ふと見るかなた、泉はほがら。

ふしぎや、山姫ほほゑみ立ちて

水に姿をうつすと見れば、

あらず、一もと百合の花。

♩ = 116

瀧

mf

一 アヘギノホー ル ヤマノカケヂニ
ニきりをふくむ かせのつめたく

mp

ハヤキコユルハ タキノオト
さとふきくれば なつのひの

mp

アタリニヒービーク タキノオト
あつさもしーらぬ いはのうへ

p *cresc.*

コノシタヤミヲ スケイヂテ
このしたかげにいこひつつ

f

ミ アグ レ バ メ ノ マヘニ
み おろ せ ば あ し も と には

mp

アラノイフキ サナガラニ オツルヨ
いくひやくせんのはくりよーの を どのよ

mf

オツルーヨ マシロキナガレ
を どのよ みどりのふちに

一三 瀧

一、あへぎ登る山の懸路に、

はや聞ゆるは、瀧の音

あたりにひびく瀧の音

木の下闇を抜け出でて、

見上ぐれば、

目の前に、

荒野の吹雪さながらに、

落つるよ落つるよ、眞白き流

二、霧を含む風の冷たく

さと吹來れば、夏の日の

暑さも知らぬ岩の上

木の下陰にいこひつつ、

見下せば、

足もとには、

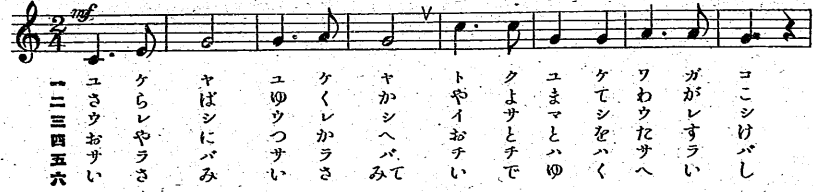
幾百千の白龍の、

をどるよをどるよ、碧の淵に。

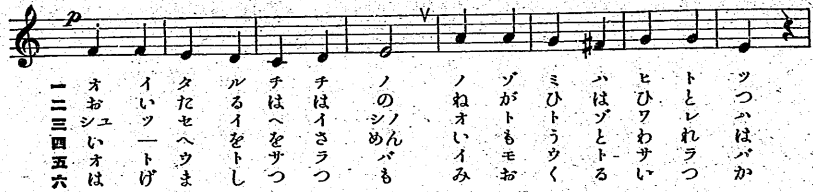
出征兵士

♩ = 112

出征兵士



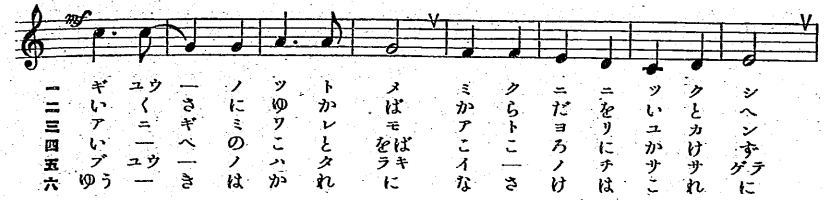
コシシけだし
 ガがレすらい
 ワわうたサへ
 ケてシをかく
 ユままとハゆ
 クよサとチで
 トやイおチい
 ヤかシへバて
 ケくれカラさ
 ユゆウつサい
 ヤばシにバみ
 ケらレやラさ
 ユさウおさい
 一 二 三 四 五 六



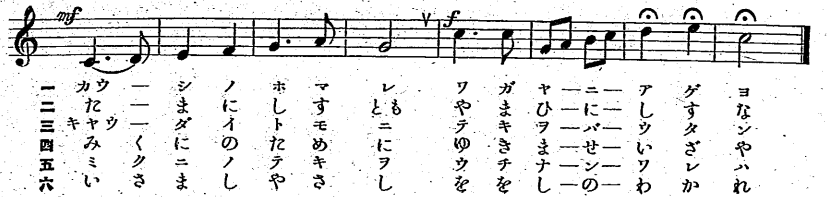
ツつハはバか
 トとレレラつ
 ヒひフワサい
 ハはゾととる
 ミひトラウク
 ゴがトもモお
 ノねオいイみ
 ノのシめんバも
 チはイさラつ
 チはへをサつ
 ルるイをトし
 タたセヘウま
 イいツ一トげ
 オおユいオは
 一 二 三 四 五 六

四四

出征兵士



シヘンサダに
 クとカけサレ
 ツいユがサこ
 ニをりにチは
 ニだヨろノけ
 クらトこ一さ
 ミかアこいな
 メばモばきに
 トカレとタレ
 ツゆフこハか
 ノにミのノは
 一さギへ一き
 ユクニ一ユ一
 ギいアイブ
 一 二 三 四 五 六



ヨナンヤハれ
 グスタざレか
 アしウいワわ
 ニにバセシの
 ヤひラまナし
 ガまききチを
 ワやテウウを
 レもニにラし
 マすモめキさ
 ホしたテや
 ノにイのノし
 シまダにニま
 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一
 カたヤみミい
 一 二 三 四 五 六

四五

一四 出征兵士

一、行けや、行けや、とく行け、我が子。
老いたる父の望は一つ。

義勇の務、御國に盡くし、
孝子の譽、我が家にあげよ。

二、さらば行くか、やよ待て、我が子。
老いたる母の願は一つ。

軍に行かば、からだをいとへ。
彈丸に死すとも、病に死すな。

三、うれし、うれし、勇まし、うれし。
出征兵士の弟ぞ、我は。

兄君、我も後より行かん。
兄弟共に敵をば討たん。

四、親に事へ、弟を助け、

家を治めん、妹我は。

家の事をば心にかけず、

御國の爲に行きませ、いざや。

五、さらば、さらば、父母、さらば。

弟さらば、妹さらば。

武勇のはたらき、命ささげて

御國の敵を討ちなん、我は。

六、勇み勇みて出行く兵士。

はげましつとも見送る一家。

勇氣は彼に、情は是に、

勇まし、やさし、ををしの別。

一五 故郷

一、兔追ひしかの山、
小鮒釣りしかの川、

夢は今もめぐりて、
忘れがたき故郷。

二、如何にいます、父母、
恙なしや、友がき、

雨に風につけても、
思ひいづる故郷。

三、ころざしをはたして、
いつの日にか歸らん

山はあをき故郷、
水は清き故郷。

故郷

♩=80

故郷

ウイコ サカコ ギにロ オいザ ヒマシ シすヲ カちハ ノちタ ヤはシ マはラ
 コツイ ブツツ ナがノ ツなヒ リしニ シやカ カとカ ノもヘ カがラ ハミン
 エあヤ — メめマ ハにハ イかア — マセヲ モにキ メつフ — グケル — リてサ — テもト
 ワおミ スもツ レひハ ガいき タづヨ キるキ ブふフ ルるル サさサ トとト

秋

♩ = 160

秋

一 トンボトビカフノドケキーヒヨリ
 二 はやしわけゆきおちぐりーひろひ

ワラヂキヤハンニカロークイヂタチ
 たにをわたりにてきのーこかりゆき

ノベニギマベニサザメキーアソープア
 きそふえものにこころはーいさーむあ

五〇 アコノーアキココチヨーヤー
 あこのーあきおもーしろやー

一六秋

一、蜻蛉とびかふのどけき日和

わらぢ・脚絆に軽くいでたち

野べに、山べに、さざめき遊ぶ。

ああ、この秋、心地よや。

二、林わけゆき、落栗ひろひ、

谷をわたりて葎かりゆき、

きそふえものに心は勇む。

ああ、この秋、面白や。

一七 燈臺

一、空には月なく、星さへ見えぬ
 雨の夜、雪の夜、嵐の夜半に、
 さかまく荒波分けゆく船は、
 何をかしるべに舵柄取れる。

二、知らずや、闇夜に海原とほく
 船路を示せる光のあるを。

知らずや、夜すがら嵐に消えて、
 ゆくてを教ふるあかしのあるを。

三、かしこの岬の巖の上に
 聳ゆる燈臺、頂高く、

夜夜輝くともし火こそは、
 行きかふ船には尊きまもり。

燈臺

♩ = 104

一三三
 ソシガ
 ララシ
 ニチロ
 ハヤノ
 ツヤミ
 キミサ
 ナよキ
 タにノ
 ホライ
 シなハ
 サばホ
 へらノ
 ミとツ
 エほへ
 ムクニ

ア
 フソ
 メ
 ナビ
 ノ
 チユ
 ヨ
 をル
 ユ
 シウ
 キ
 め一
 ノ
 セダ
 ヨ
 るイ
 ア
 ひイ
 ラ
 カタ
 シ
 リダ
 ノ
 キ
 ヨ
 あタ
 ハ
 るカ
 ニ
 をク

サ
 シヨ
 カ
 ラル
 マ
 チヨ
 タ
 ヤル
 ア
 よカ
 ラ
 すガ
 ナ
 がヤ
 ミ
 らク
 ワ
 あト
 ゲ
 らモ
 ユ
 シン
 タ
 にビ
 フ
 キコ
 ネ
 エン
 ハ
 デハ

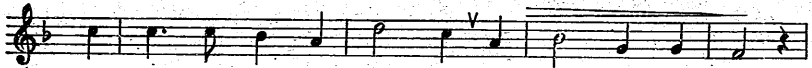
ナ
 ヲユ
 ニ
 クキ
 フ
 テカ
 カ
 をフ
 シ
 をフ
 ル
 シネ
 ベ
 ふニ
 ニ
 るハ
 カ
 あフ
 チ
 か一
 ズ
 シト
 カ
 のキ
 ト
 あマ
 レ
 るモ
 ル
 をリ

天照大神

天照大神



一 ト ヨ ア シ ハ ラ ノ ナ カ ツ ク ニ
 二 あ め の つ く だ に み た つ く り
 三 モウ コ ノ ア タ ノ ヨ セ シ ヒ モ



ス メ ミ マ ユ キ テ シ ロ シ メ セ
 い み は た ど の に み ぞ お ら セ
 カ ミ カ ゼ コ ソ ハ オ コ リ シ カ



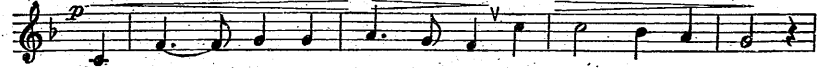
ア マ ツ ヒ ツ ギ ハ ア メ ツ チ ト
 たふ と き み み の さ き だ ち て
 コ ト ク ニ マ デ モ コ ト ム ケ テ

五四

天照大神



キ ハ マ リ ナ シ ト ク ニ ノ モ ト
 あ を ひ と ぐ さ の な り は ひ に
 カ ガ ヤ ク ミ イ ツ マ ノ ア タ リ



サ ダ メ タ マ ヒ シ ア マ テ ラ ス
 い そ し み ま し し あ ま て ら す
 イ マ モ ム カ シ モ ア マ テ ラ ス



カ ミ ノ ミ コ ト ズ ウ ゴ キ ナ キ
 か み の め ぐ み ぞ か ぎ り な き
 カ ミ ノ マ モ リ ズ イ チ ジ ル キ

五五

一八、天照大神

一、豊葦原の中つ國、

皇孫行きて知ろしめせ。

天つ日嗣は天地と

窮りなし。』と、國の基

定め給ひし天照らす

神の御言ぞ動なき。

二、天の營田に御田作り、

齋服殿に御衣織らせ、

尊き御身の、さきだちて、

蒼生のなりはひに

いそしみましし天照らす

神の恵ぞ限なき。

三、蒙古の敵の寄せし日も、

神風こそは起りしか。

こと國までもことむけて、

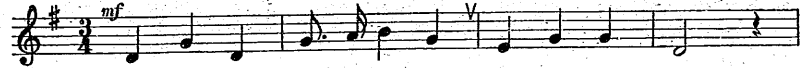
かがやく御稜威まのあたり、

今も、むかしも天照らす

神の護ぞいちじるき。

鷺

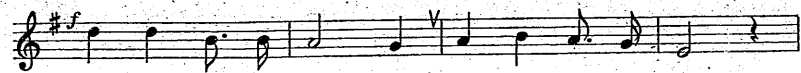
♩=108



一 クモヲ シノゲル ラウボクノ
二 どたうー さかまく せつかいの



コズエノ ウヘノ アラツシハ
こたうーに すくふ あらわしは



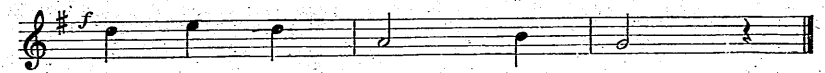
ヒロキウチウヲヘイグイス
あらしをついてあまかけり



ミソラノクンシュ サナガラニ
はぐくむ ひなに 鳥をはこぶ



ケダカクヲヲシト リノツウー
やさしくつよし とりのわうー



ツシノ スガ タ
わしの こころ

一九 鷺

一、雲を凌げる老木の

梢の上の荒鷺は、

廣き宇宙を睥睨す、

み空の君主さながらに、

氣高く、雄雄し、

鳥の王、鷺の姿。

二、怒濤逆巻く絶海の

孤島に巣くふ荒鷺は、

暴風雨をついて天翔り、

育む雛に餌を運ぶ。

やさしく、つよし、

鳥の王、鷺の心。

鎌 倉

♩=120

録
音

シ
ゴ
ユ
の
ツ
カ
レ
ケ
一
二
三
四
五
六
七
八

チ
ク
一
ば
カ
マ
キ
ン
一
二
三
四
五
六
七
八

ガ
ク
ノ
ヤ
ヤ
ラ
ハ
一
二
三
四
五
六
七
八

ハ
ジ
ハ
イ
ダ
ウ
ナ
ル
一
二
三
四
五
六
七
八

マ
ダ
マ
シ
一
ガ
ン
一
二
三
四
五
六
七
八

ノ
カ
ベ
の
ノ
に
シ
ガ
一
二
三
四
五
六
七
八

イ
コ
ミ
キ
マ
ウ
シ
ム
一
二
三
四
五
六
七
八

ソ
ノ
キ
ギ
ザ
ヒ
一
チ
ル
一
二
三
四
五
六
七
八

タ
ゲ
ミ
シ
ン
テ
ク
ラ
一
二
三
四
五
六
七
八

ヒ
バ
ラ
の
デ
ハ
ネ
の
一
二
三
四
五
六
七
八

ノ
ク
バ
ー
ン
に
テ
に
一
二
三
四
五
六
七
八

一
カ
ケ
テ
ヘ
ミ
ニ
セ
一
二
三
四
五
六
七
八

イ
キ
ハ
リ
ウ
メ
ツ
一
二
三
四
五
六
七
八

メ
ダ
ウ
ス
オ
ク
ミ
ユ
マ
一
二
三
四
五
六
七
八

キ
の
チ
キ
キ
の
テ
キ
一
二
三
四
五
六
七
八

サ
ン
タ
カ
マ
コ
ベ
カ
一
二
三
四
五
六
七
八

ガ
の
シ
タ
ダ
ミ
ス
花
一
二
三
四
五
六
七
八

ラ
ン
ノ
に
ラ
ぬ
一
ん
一
二
三
四
五
六
七
八

ム
ク
ワ
キ
リ
ノ
セ
ウ
も
一
二
三
四
五
六
七
八

ナ
セ
一
ダ
ツ
キ
一
ん
一
二
三
四
五
六
七
八

イ
ハ
ユ
ヒ
シ
ツ
ツ
サ
一
二
三
四
五
六
七
八

録
音

一
ス
ロ
と
ツ
シ
ム
ン
一
二
三
四
五
六
七
八

デ
ヤ
マ
シ
ア
ツ
ベ
シ
ラ
一
二
三
四
五
六
七
八

セ
ハ
シ
ヤ
の
ビ
ぬ
ム
ル
一
二
三
四
五
六
七
八

コ
ホ
オ
よ
シ
わ
コ
こ
一
二
三
四
五
六
七
八

シ
ツ
一
き
ヲ
だ
ハ
ヤ
一
二
三
四
五
六
七
八

ゼ
ル
ノ
ほ
ト
み
カ
と
一
二
三
四
五
六
七
八

ウ
だ
グ
と
ヒ
な
ハ
お
一
二
三
四
五
六
七
八

ギ
ー
ン
ヤ
シ
の
一
の
一
二
三
四
五
六
七
八

ル
の
マ
ば
シ
ん
ユ
シ
一
二
三
四
五
六
七
八

一
ざ
チ
ハ
へ
ふ
イ
か
一
二
三
四
五
六
七
八

ツ
ろ
ハ
と
カ
ヒ
エ
む
一
二
三
四
五
六
七
八

二〇、鎌倉

一、七里が濱のいそ傳ひ、

稻村崎、名將の

劔投ぜし古戰場。

二、極樂寺坂越え行けば、

長谷觀音の堂近く、

露坐の大佛おはします。

三、由比の濱邊を右に見て、

雪の下道過行けば、

八幡宮の御社。

四、上るや石のきざはしの

左に高さ大いてふ、

問はばや、遠き世世の跡。

五、若宮堂の舞の袖、

しづのをだまきくりかへし

かへしし人をしのびつつ。

六、鎌倉宮にまうては、

盡させぬ親王のみうらみに、

悲憤の涙わきぬべし。

七、歴史は長し七百年、

興亡すべてゆめに似て、

英雄墓はこけむしぬ。

八、建長・圓覺古寺の

山門高き松風に、

昔の音やこもるらん。

♩=84

霧

霧




mf

一 シラ ジラト アーサ ギリ ノヤ マラー コメーテ
二 しめ やかに よーの きり ちまたを つつみ




ツ キ ノゴト ニーチーリン ホノカニ ウカーブ
た ち ならぶ いへーいへ ともし びうるむ

mp



ノ デラユク ヒトカゲ タダーチニ キエテ
か げの ごと ひとさり ひとーくる おほち

霧




mf f

ケ タ タマシ モズノネ コズエハイ ツコ
ほ ろ ほろと きこゆる ふえのねいづこ



mf

タニ マヨリ ハーヒイデ キノミキースラーシ
ま ど ぎはに はーひより がらすどーぬらーし



mf f

シラ ジラト オーポーロニ アサギリナガル
しめ やかに ひそーかに よのきりながる

二、霧

一、しらじらと

朝霧野山をこめて

月のごと、日輪ほのかに浮かぶ。

野路を行く人影ただちにきえて

けたたまし、もずの音

こずゑはいづこ。

谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし

しらじらと

おぼろに朝霧流る。

二、しめやかに

夜の霧ちまたをつつみ

立ち並ぶ家家、ともしびうるむ。

影のごと、人去り人來る大路

ほろほろと聞ゆる笛の音いづこ。

窓ぎにはひ寄り、

ガラス戸ぬらし、

しめやかに、

ひそかに夜の霧流る。

三三 鳴門

一 阿波と淡路のはざまの海は、
 此處ぞ名に負ふ鳴門の潮路。
 八重の高潮かちどき揚げて
 海の誇のあるところ。

二 山もとどろに引潮たぎり、
 たぎる引潮あら渦を巻き、
 卷いて流れて、流れて巻いて、
 空にとびたつ、潮けむり。

三 裸島より渦潮見れば、
 胸も波だち眼もくらむ。
 船頭勇まし、此の潮筋を、
 落し漕ぎゆく、木の葉舟。

鳴門

♩ = 72 mp

アヤハ ハマダ トモカ アとジ ハドマ デろヨ ノにリ ハヒウ ザきツ マシシ ノほホ ウたミ ミギレ ハリバ

コたム コギネ ゾるモ ナひナ ニきミ オしダ フほチ ナあマ ルらナ トウコ ノづモ シをク ホまラ デキム

ヤませ へいん ノてド タない カがサ シれマ ホてシ カなコ チがノ ドれシ キてホ アマス ゲいヂ テてラ

ウそオ ミらト ノにシ ホとコ コビギ リたユ ノつく アしコ ルほノ トけハ コむツ ロリネ

鳴門

七〇

雪

♩=63

mf
 一 ア ザ ヤ カ ニ ユ キー コ ソ ツ モ レ
 二 p ひ そ ひ そ と pp さ さ や く け は ひ

mp
 ア ケ ガ タ ノ メ ス キ ノ ト ホ リ ガ イ
 mp ふ る ゆ き の p よ る の し づ け さ mp ほ ど

p
 ロ ジ ユ モ シ ロ ガ ネ ナ シ ラ ア マ ソ ソ ル タ カ
 ち か き ち ん じ ゆ の も り の p い て ふ の き ひ と

rit.
 キ タ テ モ ノ ア ブ ラ エ ノ ケ シ キ ニ ニ タ ー
 り そ び え て う き ば り の き ざ ゅ う の ご と ー

少し早く ♩=80

mp
 リ カ カ ル ト キ ア サ ノ キ テ キ ノ
 し pp う す れ ゆ く p ま の の と も し ひ

f
 チ マ タ ヨ リ チ マ タ フ コ メ テ タ カ ナ レ バ
 ひ と は み な mf ね や に こ も り て む ら ざ と は

mf 次第に速く
 ヒ ト ハ メ ザ メ ス ワ ウ ー ラ イ ハ ザ フ メ キ タ チ テ
 mp ふ か く ね む り ぬ ゆ き を れ の p た け の ひ び き も

mf Tempo I. rit.
 ユ キ カ キ ノ オ ト モ マ ジ レ リ
 ま ど か な る pp ゆ め を み だ さ す

二三 雪

一、鮮かに雪こそ積れ、
明方の目ぬきの通。
街路樹も銀なして、
天そそる高き建物、
油繪の景色に似たり。
かかる時、朝の汽笛の
巷より巷をこめて
高鳴れば、人は目覺めぬ。
往來はざわめき立ちて、
雪かきの音もまじれり。

二、ひそひそとささやくけはひ、
降る雪の夜の静けさ。
程近き鎮守の森の
いてふの木ひとりそびえて、
浮彫の巨像の如し。
薄れ行く窓の燈、
人は皆ねやにこもりて、
村里は深く眠りぬ。
雪折れの竹の響も、
圓かなる夢を亂さず。

スキーの歌

スキーの歌

♩ = 120
 一 カガヤクヒノカ—グ—ハユ—ル—ノヤ—マ
 二 とおとおおほぞ—ら—はし—る—だい—ち
 三 ヤマコエヲカコ—エ—クダ—ル—シャメ—ン

カガヤクヒノカ—グ—ハユ—ル—ノヤ—マ フ
 とおとおおほぞ—ら—はし—る—だい—ち いつ
 ヤマコエヲカコ—エ—クダ—ル—シャメ—ン タ

モトヲメガケテ ス タ—トキ—レ—バ
 ばくかけな—き—てん—ち—の—う—ち—を
 チマチサヘギル タニヲ—バ—メ—ガ—ケ

七六

コユキハマヒタ—チ—カゼ—ハ—サケ—
 すとつくかざし—て—われ—は—かけ—
 ヲドレバサナガ—ラ—ヒラウ—ノ—ココ—

ブカゼハサケ—ブ
 るわれはかけ—る
 チヒラウ—ノ—ココ—チ

★ この二重音は低音部を主旋律とす

ブカゼハサケ—ブ
 るわれはかけ—る
 チヒラウ—ノ—ココ—チ

スキーの歌

七七

二四 スキーの歌

一、輝く日の影、はゆる野山。

輝く日の影、はゆる野山。

麓を目がけてスタートできれば、

粉雪は舞立ち、風は叫ぶ、

風は叫ぶ。

二、飛ぶ飛ぶ大空、走る大地。

飛ぶ飛ぶ大空、走る大地。

一白影なき天地の中を

ストツクかざして我は翔る、

我は翔る。

三、山越え、丘越え、下る斜面。

山越え、丘越え、下る斜面。

忽ちさへぎる谷をば目がけ、

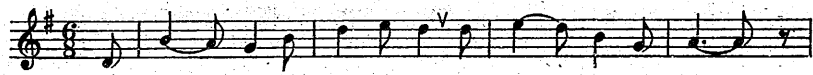
躍ればさながら飛鳥の心地、

飛鳥の心地。

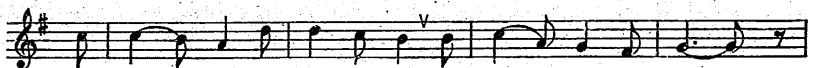
夜の梅

152

夜の梅



一 コズ エマ バラニサ キーソメシ
二 は な も さ え だ も そ の ま ま に

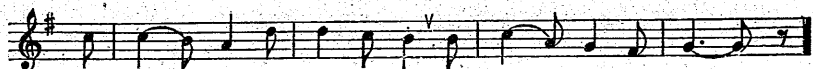


ハナ ハサ ヤカニ ミエーネドモ
う つ る す み ゑ の が み し や う じ



ヨル モカ クレヌカ ニメデテ
か を り ゆ か し く お も へ ど も

八〇



マド ハトザ サヌヤ ミノウメ
ま ど は ひ ら か め つ き の う め

二五 夜の梅

一、梢まばらに咲初めし

花は、さやかに見えねども、

夜もかくれぬ香にめでて、

窓はとざさぬ闇の梅。

二、花も、小枝もそのままに

うつる墨畫の紙障子。

かをりゆかしく思へども、

窓は開かぬ月の梅。

夜の梅

八一

齋藤實盛

♩=92

齋藤實盛



一 ト シ ハ オ ユ ト モ シ カ ス ガ ニ
二 に し き か ざ り て か へ る と の



ユ ミ ヤ ノ ナ ラ バ ク タ サ シ ト
む か し の た め し ひ き い で て



シ ロ キ ビ シ ヒ ゲ ス ミ ニ ソ メ
の ぞ み の こ と 一 く こ ひ え つ る 一

八二

齋藤實盛



ワ カ ト ノ バ ラ ー ト キ ソ ー ヒ ツ ツ
あ か ー ち に し き の ひ た ー た れ を



ブ ユ ウ ノ ホ マ レ マ ツ ダ イ マ デ
こ き や う の い く さ に か が や か し し



ノ コ シ シ キ ミ ー ノ ラ フ シ サ ヨ
ま み ー が こ こ ろ の や さ し さ よ

八三

二六、齋藤實盛

一、年は老ゆとも、しかすがに
弓矢の名をばくたさじと、
白き鬢鬚墨にそめ、
若殿原と競ひつつ、
武勇の譽を未代まで
残しし君の雄雄しさよ。

二、錦かざりて歸るとの
昔の例ひき出でて、
望の如く乞ひ得つる
赤地錦の直垂を、
故郷のいくさに輝かしし
君が心のやさしさよ。

卒業の歌

卒業の歌

♩=104

ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ

ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ

ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ

ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ
ナナナナ

八六

卒業の歌

ナミヨマ
ヘのヨハ
フツニの
一しヒタ
コカラか
ソにクレ
ウワチヨ
レハチ
シエト
ケタケカ
レるハ
ナ
フサケに
ホカサカ
ニのナヤ
ハもソナ
ノのソハ
ラみレ
クナリ
サとバ
ギヒヘ
ナモ
ニ上オ
シのモ
キヒヘ
チとバ
ソナリ
ヘみレ
テのシ
ノカシ
モチ
マサケ
モチミ

八七

二七、卒業の歌

一、うれし、うれしや、うれしやな。

人の子どもの、おしなべて

ふむを御國のおきてなる、

學の道の六年をば

卒へし今日こそうれしけれ。

柳櫻の春にほふ、

錦をそへて野も、山も。

二、うれし、うれしや、うれしやな。

いろはのいをもわきまへぬ

身のいつしかに積得たる、

西も、東も知らざりし

身のいつしかに分得たる、

世の人並の文字の數、

世の人並の道の筋。

三、うれし、うれしや、うれしやな。

六年の月日、手を取りて

教へ給ひし師の君の

導なくば、いかで我が

心に開く、智は、徳は。

思へばうれし、師の情、

思へばうれし、師の恵。

四、うれし、うれしや、うれしやな。

師の賜の智を、徳を、

かぢに、しをりに、世の海を

わたりて行かん、なほ高き

學の高嶺よぢて見ん。

師の君さらば、健かに、

我が友さらば、健かに。

發行所

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座一丁目五番地

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者

大橋光吉

東京市小石川區久堅町百〇八番地

製複許不



文部省

代表者 專務取締役 杉山常次郎

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座一丁目五番地

昭和七年十二月十日發行
昭和七年十一月三十日印刷

定價 金拾四錢

評定常小學唱歌第六學年用



14
K
15

